



明代（1368～1644）に登場する公案小説集のなかで、「竜図公案」を例にとってみよう。全十巻、63のごく短い話からなる。主人公、包拯がさまざまな事件を解決する内容であるが、各話の間で、互に関連性はまったくなく、それぞれ別個のものである。面白いのは、それぞれの話の舞台が異なっていることである。いくら包拯が転動していた可能性があるとはいえ、中国各地を何十箇所行脚したとは、およそ現実的ではない。おそらく、その地方の傑出した裁判官の評判や逸話が、包拯に仮託され、脚色されたのであろう。また、すべて短編となっているのは、文言と呼ばれる文語（わが国でいう漢文を想起されるとよい）ということばを用いて書かれているせいである。ただ、同書は、魯迅先生に「文意が甚だ拙劣で、わずかに文字を知るものが書いたのであろう」（《中国小説史略》第27篇）と酷評されている。亡霊が出てきて犯人の名を告げたり、夢を見て事件解決の糸口をつかんだりして、つまり他力本願で、包拯が事件を解決するケースが多く、現代人から見れば、非科学的ともいえる点で、先生にはお気に召さなかったのではないだろうか。

300年続いた明朝は農民起義軍によってあっけなく滅ぼされてしまう。そして中国東北部にいた満州族が中央に進出する。ラストエンペラーで知られる大清帝国の誕生である。ときに1662年、ちょうど日本は江戸元禄時代を迎える少し前であった。時代は清朝中期、道光、咸豊年間（1821～1861）。当時、北京に、都随一という評判の石玉昆なる講師がいた。のちに彼の語った公案物が筆録され、《竜図耳録》という小説に姿を変え、さらに、某人によって改変され長編小説《三侠五義》と名前を変えて出版されることとなる。包拯は登場するものの、タイトルが示すとおり、三侠五義といった武術にすぐれた勇士の面々が活躍する物語へと変貌を遂げているこ

とが注目されるであろう。本書では、包拯はもちろん判官であるが、従者ひとりをつれ、お忍びで、悪事が行なわれていないかどうか、各地を見て回る役どころとなっている。



そこで思い起こされるの 《三侠五義》の包拯は、冒頭述べた短編小説集《竜図公案》である。各話とも別個で、舞台がバラバラであった短編物語が、ここでは、換骨奪胎、つなぎあわせ、長編化されている。またことばも、聞き書きという性質上、文言から北京を中心とする口語を交えた白話が用いられ、とりわけ会話部分が生彩に富む。まさに面目一新といつてよいであろう。また包拯が危機に陥ると、どこからともなく、勇士たちがやってきて、救うということになっている。と、ここまで聞くと、日本のある有名な人物を思い浮かべることができるではないか。そう、国民的英雄（？）ともいふべき、水戸黄門こと徳川光圀である。ちなみに、武術にすぐれた勇士と書いたが、刀剣術、拳法の技量はいうまでもなく、なかには、なんと壁を駆け上ることができる者や、水の中を自由に活動できる者までが含まれている。いうなれば日本の忍者である。こうなると、公案というジャンルに収まらないので、通常、俠義小説といわれる。カンフー映画の原作となっている小説を武俠小説と呼び、近年、日本語に数多く翻訳され始めている。その作者、金庸、古龍といったひとたちはこの流れを汲むといえよう。

この時代、公案と銘打つ小説は雨後の筍よろしく陸続と出版される。曰く、《施公案》、曰く《彭公案》、曰く《劉公案》、曰く《李公案》、曰く《林公案》と、まあ枚挙に暇ない。しかし、これを境に公案小説は急激に衰え、公案を謳った小説は、二度と、出版市場に現れることがなくなった。だが、公案というジャンルの命脈が絶たれたことを意味するわけではない。

その理由については稿を改め、述べることにする。

（待 続）

たけのうち まこと（助教授・中国文学）